

## 天を軸として生きる

丸山 勉

### [聖書] 詩編 8 編 1～10 節

【指揮者によって。ギテイトに合わせて。賛歌。ダビデの詩。】

主よ、わたしたちの主よ あなたの御名は、いかに力強く  
全地に満ちていることでしょう。天に輝くあなたの威光をたたえます  
幼子、乳飲み子の口によって。あなたは刃向かう者に向かって砦を築き  
報復する敵を絶ち滅ぼされます。  
あなたの天を、あなたの指の業を わたしは仰ぎます。  
月も、星も、あなたが配置なさったもの。  
そのあなたが御心に留めてくださるとは人間は何ものなのでしょう。  
人の子は何ものなのでしょう あなたが顧みてくださるとは。  
神に僅かに劣るものとして人を造り なお、栄光と威光を冠としていただかせ  
御手によって造られたものをすべて治めるように その足もとに置かれました。  
羊も牛も、野の獣も  
空の鳥、海の魚、海路を渡るものも。  
主よ、わたしたちの主よ  
あなたの御名は、いかに力強く 全地に満ちていることでしょう。

### [序] 神様の御わざを讃えている賛歌・詩編 8 編

今日もご一緒に「詩編」の言葉を味わうことが出来ることを感謝致します。

この詩編は、表題にもありますように、「賛歌」つまり賛美の歌ですね。

「主よ、わたしたちの主よ あなたの御名は、いかに力強く  
全地に満ちていることでしょう。」

このことばが、頭と終わりに繰り返されています。この言葉にサンドイッチにされて、神様の御わざに驚きの声をあげている賛歌です。

一見すると、この詩編 8 編は、私たちが触れ、感じる事ができる自然の偉大さ、素晴らしさを歌った詩編のように捉えてしまうことがあるかもしれませんが、そうではなく、あくまでもここで讃えられているのは、自然ではなく、それをお造りになった主なる神様です。

### [1] 詩編 8 編は、創造物語に対する応答(レスポンス)

この詩編 8 編をお読みになって、同じ旧約聖書の「創世記」の初めの、創造物語を思い起こす方も多いと思います。共通する部分はいくつもありますね。けれども、私は今回この詩編を味わう中で、これは、ある意味、創世記の出来事に対する、人

間の側の驚き、感謝、賛美といったものが、詩の形で言い表されているもの、或いは詩編はユダヤ人たちが歌った「賛歌」ですから、歌われたものだ、と言っても良いのではないかと思います。つまり、まず、神様からの語りかけが既にあり、それへの人間の側の「アーメン」と「応答」がここにある、と思ったのです。

「コール・アンド・レスポンス」という言葉をお聞きになった方もあると思います。よくゴスペルなどを歌う時に、一人のリーダー格の歌手と、それに合わせるクワイアが、掛け合いの中で歌を歌っていく形があります。または、アフロアメリカンの方たちが集まる教会の礼拝の中でも、牧師が語る言葉に、会衆が「アーメン！」と応えるようなことを見聞きしますが、あれが「コール・アンド・レスポンス」ですね。

この詩編8編も、この詩人が何か思いつきで神様を賛美した、というのではなく、既に知らされていた神様のなさった出来事、御わざに感動して、応答して綴った詩と言えるのではないのでしょうか？

—「聖書」というのは、バラバラではなく、深い所で繋がり合っているのですね。

例えば、創世記1章1節の言葉は、「初めに、神は天地を創造された」です。これに対する応答が、詩編8編2節或いは10節の、「主よ、わたしたちの主よ、あなたの御名は、いかに力強く全地に満ちていることでしょう」である、と言えるのではないのでしょうか。

また、創世記1章16～18節の言葉、「神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた。神はそれらを天の大空に置いて、地を照らさせ、昼と夜を治めさせ、光と闇を分けさせられた」がありますが、それに対して、詩編8編4～5節の、「あなたの天を、あなたの指の業をわたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。そのあなたが御心に留めてくださるとは人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう。あなたが顧みてくださるとは」と、神様の宇宙大の大きな御わざを讃え、またその神様が、この本当に小さな自分の存在をも御心に留めてくださっていることに大きな驚きを持って応答の賛美をしています。

さらには、人間の創造を語る、創世記1章27節の言葉、「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された」に対しては、詩編8編6節では、詩人は、「神に僅かに劣るものとして人を造り、なお、栄光と威光を冠としていただかせ…」と、私は何と尊い存在としてこの地上に生命を与えられていることか！と、感謝のうちに賛美しています。

「詩編」を味わう幸いというものは、このような詩編のことばを、自分の詩や歌として、神様に応答する幸いを頂くことだと言えるのではないかと思います。

## [2] 「逆転」の詩編

しかし、私たちは、今は何の不思議もなく神様を讃えることが自分の生活となっているかも知れませんが、考えてみましょう。これは、**決して当たり前のことではない**と思うのです。私は、それは、人間が生きる上での軸が、或いは土台が**ひっくり返る経験**だと、つくづく思われるのです。

それは、「人間の常識」の上に立脚しない生き方だといっても良いかもしれませんが。もちろん、一般常識を身につけるといことは大事なことでしょう。けれどもそれは、基本的に人間同士の関係、横の繋がりのことだと思います。本当に持つべき「**魂の土台**」、「**人生の軸**」というものは、「横」を見ても見つからないのです。

では、どこにそれはあるのですか？「天に輝くあなたの威光をたたえます」(8:2b)と言っているように、それは**この地上ではなく、「上」を仰ぐところ**に見い出せるのではないのでしょうか？そのためには、私たちはある意味、**愚か者**にならなければいけないのかも知れません。“愚か者”と言う言い方が適切でないなら、それこそ3節にあるように、「**幼子、乳飲み子**」としての、**全く素朴な信頼の心を持つこと**ではないのでしょうか？—その時に、私たちの力では与えられない、**人生の価値の変革**、いや、**逆転**が、**上から、恵みとして与えられる**のだと思います。

## [3] 新島 襄の改心の出来事

その恵みを体験した著名な人物に、同志社大学の創立者・新島襄がいます。彼が最初に信仰に導かれのは、まだ18才の時、1860年と言いますから、江戸時代の末期、宣教師が発行した漢訳の聖書の小冊子を友人の部屋で見つけて、その友人から借りて読んだ時であったそうです。当時の日本は、聖書を読むだけでも死罪となるような時代でした。ひっそり隠れるように聖書の言葉を読む中で、彼はその時、創世記1章1節の言葉が、電撃が走るように、深く心に突き刺さりました。「**初めに、神は天地を創造された**」。

「この言葉が**真実**であったら、これは大変な事だ」と、**幼子、乳飲み子の心**で受け止めたのだと思います。その時のことを、あとでこのように綴っています。

「私は聖書を置いて、あたりに目をやってみた。そして、このように自問した。**私を作ったのは誰か、私の両親か？ そうではない。それは私の神だ。神が私の両親を作り、そして、両親を通して私を作られたのだ。私の机を作ったのは誰か？ 大工か？ そうではない。それも私の神だ、神が地上に木を生えさせられたのだ。…そうであるなら、私は神に感謝し神を信じ、神に対して誠心をつくさなくてはならない。**」

そして、新島は更にこのようにも自分の心を記しています。  
『**自分はもう両親のものでなく、神のものだ**』と叫んだ。その瞬間、父の家に私を固く結びつけていた鎖は、ばらばらになったのです。自分は地上の父に仕える以上に天

の父に仕えなければならない。こういう新しい考えに勇気づけられて、私は一時、藩主を見捨て、家と祖国を一時去ろうと決心したのです」と。そして彼は、**アメリカ**に渡ったのです。新島襄 21 才の時でした。この密出国ということは、当時は大きな罪でもありました。けれども、聖書の言葉との強い出会いを経験して、彼は神様に押し出されたのです。彼はそれまでは、横の繋がり（人間関係）がすべてだった。そのことで苦しい事もあったようです。しかし彼は、天地創造の神様、これ以上偉大な存在はないそのお方が、この自分の命を支え、愛しておられることを知って、**価値観が逆転したのです**。正にこの詩編 8 編の 4～5 節の言葉の通りだと思います。

「あなたの天を、あなたの指の業を わたしは仰ぎます。

月も、星も、あなたが配置なさったもの。

そのあなたが御心に留めてくださるとは人間は何ものなのでしょう。」

一彼は、自分へと語る聖書を知り、そこで語られている神様を知って、**自由**になったのです。**神様の懐に飛び込むように**アメリカで学ぶようになり、そしてやがてアメリカにやってきた岩倉使節団の通訳として選ばれ、評価され、一度は捨てた日本で、明治期の教育界をリードする者となったのです。

#### [4] 「自分に意味を求めるのではなく」—ある友人の証し

クリスチャンとは、皆多かれ少なかれ、この新島襄と同じような所を通されてきたのではないのでしょうか？表面的に、劇的である・ない、ということは大した問題ではありません。この地上に生きながら、しかし、この地上を超えたところから、即ち**天から、上から与えられる価値**に生きるように変えられた者は、既に神様があなたの中に働かれている、ということです。

私の大泉教会時代の友人で、しばらくご一緒に礼拝生活をしてきた、渡辺さんという男性がいます。彼は、今は理学博士で、ある研究機関で働いています。その彼がある時、自分の若い時の証しをしてくれました。少しご紹介させていただきます。

「大学の時、これから社会人になるという時に、自分の人生を考えて**ものすごく不安**になったんですね。その時はテニスに熱中していたんですが、これではいけないと思って、物理のほうに集中しようとしたんですけども、やはり**何か**が虚しいんですね。その時たまたま読んだ本が**三浦綾子さんの『塩狩峠』**で、私は頭をハンマーで殴られたような感動を与えられて、私がいた寮に教会の特別集会のチラシが入っていて、教会に行くようになったのです」。

しかし、すぐにバプテスマを受けた訳ではありませんでした。

「けれどもしばらくは**葛藤**がありました。それは、**信仰を持つ**というのは、結局自分に負けているんじゃないか、何かに頼ろうとしているんじゃないか、もう少し自分で一

生懸命やってみないといけないと思って、教会を離れてしまったんです。そしてマラソンを走り終えたらその向こうに何かが見えるかもしれないと思って走っても、何か虚しい。また、自己開発研修に参加してみても自分の中にあるものが埋められない。いよいよ、自分は生まれても必要とされていないのではないかと、思い、大学の一番高い棟に夜景を見に行き、ここなら飛び降りたら楽かな、と思った事もありました。しかし、そういう苦しい中で、もう一回、教会に行きたいという気持ちが心の中に起こってきたんです。そこで電話帳で教会を調べて行ったなら、その時が特別伝道集会だったんです。そのメッセージを聞いて、ああ、神様の所に戻って来れたなあ、と思いました。」

渡辺さんはその教会でバプテスマを受けました。そして「その後自分が変わった事」についてこのように語りました。

「毎日生活を続けて行く中で失敗もしますし、自分自身の醜さとかにも出会いますし、今まではそれを自分で解決しなくちゃいけないと思っていたのが、神様の方から、「お前の罪はもう既にわたしが負っているんだよ」とおっしゃるイエス様がいて下さるんだ。だったら、何でうじうじ悩むことがあるだろうかと、思います。」

そして、このようにも語ってくれました。

「自分の人生は神様によって与えられていることに気がついて、ですから、何でも自分に意味を求めらなくて、神様がどのようにご計画されているのかな、と思うようになりました。すごく生きることが楽になりましたね。」

### [結] 「天」を軸として生きられる

神様を知る、イエス様を知る、ということは、渡辺さんの言葉を借りると、「生きることが楽になること」だと言って良いではないでしょうか。この詩編8編でも詩人は驚きを持って語っているのではないですか！—「人の子は何ものなのでしょうあなたが顧みてくださるとは。」(5節)と。

そして、ここでハッキリと書いています。人間とは、尊い存在だ。それは「神にわずかに劣るものとして人間を造り、なお、栄光と威光を冠としていただくせ」るほどに重んぜられている存在なのだ、と。だからこそ、たった一人の私の存在のために、神様の独り子のいのちが十字架の上で注がれているのです。私たちは、神様の顧みの中にいつも置かれています。これは確かなことですし、「私は例外だ」などという人は誰もおりません。

私たちは、この地上に足を踏みしめながら、「天」を軸にして生きることが出来るようにされているのです。天地創造の神様、そして、私たちには、今、十字架にかかれ、甦って天におられる主キリストが、「上から」私たちを支えてくれているのです。

これは私のイメージですが、これは良い意味で捉えて頂きたいのですが、「操り人形」の如くに、私たち一人ひとりと「天」は、決して切れない線で、繋げられていて、私たちがどんなに迷子になっても、いざと言う時に引っ張って助けてくれる、そんな目に見えない「愛の糸」があるのではないのでしょうか？それは「聖霊」と言っても良いでしょう。そして、私たちの地上の役割が終わり、もう帰っておいで、という時に、その糸を引き上げて下さるのではないのでしょうか？

感謝なことに、この地球は、どの場所に身をおいても、仰ごうと思えばいつでも空を仰ぐ事ができます。八方ふさがりに思える時にも、です。神様は時に、私たちに試練をお与えになることもあります。が、「神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練にあわせることはなさらず、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」(一コリント 10:13) とありますが、そのように、どのような時も、上を仰ぐことへと私たちをいつも呼びかけていると思うのです。

そして、私たちはあのいにしへの詩人と共に、今日も神様を賛美できるのです。「主よ、わたしたちの主よ あなたの御名は、いかに力強く 全地に満ちていることでしょう」!

お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、今日は詩編 8 編からご一緒にあなたの偉大なご愛に触れることが出来、感謝致します。詩編 8 編、まるで秋の青空のような、暗いところが全くない、賛美に満ちた詩でしょうか！この詩を、私たちの詩として、賛美として、今あなたに捧げることができることは大きな恵みです。

主よ、あなたは、指先でこの宇宙をお造りになりました。そのあなたの御手によって、いつも私たちは支えられているということ、それは大きな驚きであり、また、安心です。そして、御独り子のいのちと引き換えにしてまで、徹底的に私たちを愛して下さい。あなたのご愛を感謝致します。

どうか、この一週間も、あなたの愛をいっぱいを受けながら、そして、御言葉とあなたの愛に応答して、感謝と賛美の日々を歩ませてください。どのような時も「上」を見上げる信仰をお与えください。

私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。  
アーメン。